

労基法と私たち

宮本ま子

映画のテーマがラヴロマンやスペクタクルものからごく日常的な社会性をもつものへかわってきたのはいつの頃からか。今年の映画アカデミー賞の多くを独占した「フレイマールイマー」を見ると今日のアメリカが抱えるナウな問題がよくわかる。

デンマーク映画「女ならやってみな」も問題提起としては非常におもしろかったが六日上映予定の「看護婦のオヤジがんばる」は日本の共働き家庭を描いたものでいい。そう身近にシビアな映画、笑いの中に共感の涙がじんわりしてくる。原作はハブ職安に勤める藤田健次（ハオ）さんの同名の書でサブタイトルに「看護婦のオヤジ」とある。長時間労働や夜勤の多い看護婦の妻の健康を案じてオヤジ夫婦たちに見守る看護婦の労働条件アップを呼びかけた投票がきっかけで生まれたエッセイ。三年間で十二版を重ねたベストセラーだ。辛い

思いを凝けてまで女が働く事の意味、家庭と仕事の両立、家事育児の分担、働き続ける為の環境整備、そして夫と妻が人間らしく向きあえる生活とは……etc. 何とまあ、ドッサリ問題があることが。今、焦点になっている「労基法改正」をあらためて考えさせられた。

一昨年の暮、労基法研究会が出した答申案は母性保護の一部切り捨てと男女平等法の制定、つまりムキとアメの二本立て。働く職場環境がぐんと良くな。だから一日二時間の超勤制限をとり払い、深夜業もOK。専休は不要。こうして男並みに働けば職場での男女平等は法で認めようという訳だ。「夜勤で疲れて眠ってばかりいる妻の顔で子をおんぶしながら妻たちの労働条件向上を叫んでいる夫たち……」の念願家の理想は明日は我が家の現実となる。妻にやらせたい事があると云々いしば。て家事育児を支える男役は数少ない。それに夫と妻を入れ代えて考えてみるとうか。まさに労働条件の問題は、働く女も家庭の主婦も想う子は同じなのである。（以下行書で書く※印へ）

今年は「婦人の十年」の折返し年、労働法問題を軸に、職場の女は仕事の質、条件をあらためてみなおし、家庭の主婦は、我が家の民主度を計りなおしてみよう年にしたものだ。

三三講義会報告

無意識の差別（女と男）

講師 荻田玲子

四月十五日（土）午後六時半～九時

勤労福祉会館中会議室にて

新会員紹介

三三講義会に出席して

佐藤 浩子

とにかくこの「BWの会」には、驚かされる事ばかりである。

まず様子を見てみようと思つた三三月の例会で入会の動機を求められた。女子教育について思いつくままに話した所、即隣の荻田さんと意識投合。それを見ていた会のオエラ方（？）が三三講義会提議。会員賛成。荻田さん承諾。私唖然。そのスピーディな決定に感激しつつも、「BWの会」なるものは余程話題が無い人ではないかと危惧する事になった。

さて当日もお客さん気分でもノコノコ出かけ楽しくおしゃべりしていた所、荻田さんの前座をやれとのこと。なんという恐しい会だ。

講義会の内容は、女子の誕生から学校生活終了までの私達の周

りにある無意識の女と男の差別を取り上げたものだ。この講義が成功した原因は、荻田さん自身の生活体験と共に、小学校という教育現場の経験を生かして非常に具体的に身近な例をふんだんに用いたことにあると思う。「無意識のうちに女と男は差別されています。」これだけでは訴える力は無い。社会の隅々まで浸透している差別は、その例が身近であればある程、また今まで見過ごしてきた事であればある程、知らされた時には背筋がぞくぞくとするものだ。私も見過ごしていた事実を知られて、はつとする思いが何度もした。

女と男の差別の根源は、一度作られてしまった男性社会の中で、断定され、まことしやかにささやかれ続けた男女の役割論によって、女は「女」に、男は「男」に作られ続けている事にあると思う。このような社会に思っている限り、「人間」として生まれた皆の子供たちは、明確に「女」と「男」という二種の色に塗り分けられてしまう。そしてその色の色に染まっただけで、無意識に次の世代の子供たちを染め分けようとする。かくして時は経ち、科学が進歩しても女と男の差別はなかなか消えない。

この思考環を断ち切る方法の一つは、人々がこの無意識の差

別を認識し、自らの子供たちを性差以前に「人間」として育てることだろう。しかしまだ何かある筈だ。この何かについて考える度にこの社会は充滿している無意識の差別を思い知らされる気がする。

人前で恥をかったのが良かったのか、講演が終わってから、何人かの人達に話しかけられた。様々な年齢と職業の人々に触れる事ができてとても嬉しかった。夜のバス停は、多分寒かったけど一層星は輝いて見えた。できればもっと多くの会員の方々とあの星を見たかった。

事務局便り

①女のパート販売先リストを津田事務局までお知らせ下さい。

②五月七日、販売新聞長崎支局を加藤・津田訪問。

「女」からだしの清野記者に、講演会講師依頼。

③前期分の会費（459月）納入を！

事務局まで

会員—1800円 準会員—1200円 50円切手でも可

④最近、例会の欠席者が多いため、通信費がかさみ、会費が不足がちです。新会員の入会を募集しています。

⑤第一回文化講演会の講師、野呂邦暢氏が去る五月七日逝去されました。

—婦人のつどい報告—

岸本圭子

「婦人問題を考える長崎のつどい」(長崎婦人少年室、県主催)が24日午後の時半から長崎市桜町、県勤労福祉会館で開かれた。「男女の平等と婦人の社会参加を進めよう」と題するシンポジウムや女性ニュースキャスター・有馬真喜子さんの講演があった。働く女性の立場から会員の宮本圭子長崎放送制作部副部長の仕事の難しさを高める②家庭内を民主化し、家事の分担を進める③職場だけの人にならず、地域や社会活動に主婦の立場としても参加する—などを提言。また、会場から会員の田上井手さんが質問に立ち、女性の立場から鋭い指摘がなされ、男性提言者が返答に窮した場面もみられた。

「女ならやってみな」

女たちが女に向けて作った映画です。エレンは50歳。もしも女と男の役割が入れ替わったら……。

去る5月1日、NBCビデオホールに於て、昼、夜の二回上映されたものです。映画を見て様々な感じ方、受けとめ方があると思いますが、会員の思野さんに感想を聞いてみました。みなさんは、どのように感じられたでしょうか。

女ならやってみなさいを見て

児野 美晴

女と男の役割交換は現実社会をみごとに風刺していた。しかし役割を入れ替えてみても何もかわりはしないし、現実社会でも、空想社会でも、女たちも男たちもいきいきと生きてはいけない。女と男の役割分担が変わっていかねば何も変わらないのではないだろうか。

エレンは「生きがい」を求めて、仕事をするのだが、生きがい仕事となりうるのだろうか。彼女の仕事に対する態度、例えば掃除婦は嫌だとかにも疑問が残る。仕事とは何なのか。能力と賃金の問題など中途半端な気がしてならない。

推薦映画

年に一度は映画に行こう、
それこそ婦で子供を連れて

看護婦のオヤジがんばる

6月11日(水) 21日(火) 長崎セントラル劇場にて

※前巻事務所にあります。

子供らが妻に似てるという裸婦のルノアール飾りぬき夜勤の夜夫婦版 寅さん？ クレイマーVSクレイマーよりさらにぐつと身に迫る。

古今集 卷十四

おほぞらはこひしき人のかたみかは

物思ふごとにながめうるむ

さかぬのひとぞね

〔訳〕大空は恋しい人の形見であるかよ。その形見でもない大空が、どうしてこう、物を思ふたびごとにながめられるのだろう。

BWの会へTV出演の依頼

・NHK「話題の星」% 鶴 初美

・KTN「A」は長崎テレビ井戸端会議% 22

毎週末毎日 岸本桂子

清野記者より「まうそく返事がありません」

取材まかりて長崎へ！

※一方研究専門職の分野の女性に、現行労基法が足かせとなって、職域拡大の阻害要因になつてゐるのも現実にある